ウェルカム！
くまもと介護の扉

©2010熊本県くまモン

各取り組みを取材した
動画素材公開中！

詳しくはこちら →

熊本県 健康福祉部 長寿社会局 高齢者支援課
〒862-8570 熊本県熊本市中央区水前寺6丁目18番1号（行政棟 新館4階）
TEL 096-333-2215　FAX 096-384-5052

私のイチ推し！

介護の仕事

～介護の未来を創る取組み事例～

令和7年（2025年）3月　熊本県

もくじ

P2　はじめに

P3　CASE 01
多様な人材が活躍できる職場づくり
社会福祉法人 熊本菊寿会　特別養護老人ホーム さわらび

P5　CASE 02
見守りセンサーを活用した
安心で快適なケアと負担軽減
医療法人 博光会　介護老人保健施設 ぼたん園

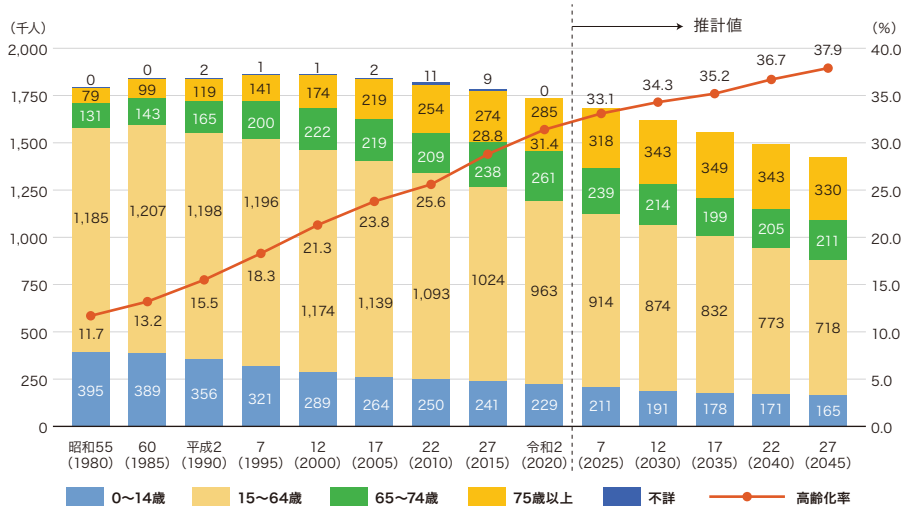
P7　CASE 03
世代を超えた地域交流の場づくり
有限会社 美里在宅支援事業所　NPO法人みさと

P9　CASE 04
産学官が連携した
スマート福祉人材の育成
熊本県立阿蘇中央高校

はじめに

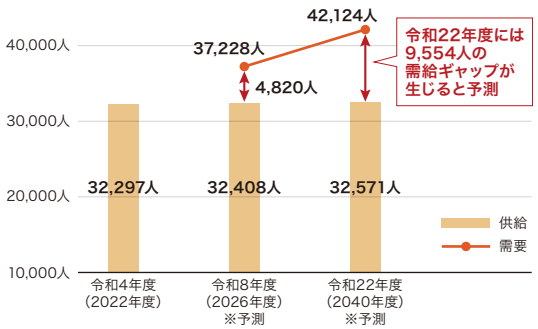
熊本県では、令和6年（2024年）10月1日現在で高齢化率が32.6%と、「県民の約3.1人に1人が65歳以上の高齢者」です。団塊ジュニア世代が65歳以上となる令和22年（2040年）頃には、高齢化率が36.7%に達するとの推計もあり、介護サービス需要や給付費は増加することが見込まれます。一方で、15歳から64歳までの生産年齢人口が急減し、人材の確保が厳しい状況となることが見込まれ、高齢者が住み慣れた地域で、安心安全に暮らし続けられるためには、介護人材の確保や定着を促進する必要があります。

●熊本県の高齢化の推移と将来推計



（資料）　昭和55～令和2年：総務省統計局「国勢調査」　令和7～27年：国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」（令和5年推計）
（注）　令和2年の数値は令和2年国勢調査確定時に遡及改訂している。

●熊本県の介護人材の需給推計



（資料）　第9期熊本県高齢者福祉計画・介護保険事業支援計画
（注）　端数の関係で差引き計算が一致しない

この冊子では、介護人材の確保・定着やサービスの質の向上等に向け、県内施設・事業所等で行われている様々な取組みの概要や、その効果などを紹介しています。

それぞれの取組みを参考にしていただき、各施設・事業所等での取組みにつなげていただければ幸いです。

CASE

01

多様な人材が活躍できる職場づくり

社会福祉法人 熊本菊寿会
特別養護老人ホーム さわらび
施設長　斉藤 大祐さん
［熊本市北区］

動画は
コチラから
▶

左／障がいのあるスタッフを含めた研修の様子。サービスの質向上を目的としている
上／外国人スタッフを含めた新人研修の一コマ。介護の基本を一から学ぶ

外国人スタッフや障がいのあるスタッフの活躍

現在、外国人スタッフはベトナムから2名、ミャンマーから3名、インドネシアから2名、ネパールから2名の合計9名が働いています。また、知的障がいのあるスタッフ2名、視覚障がいのあるスタッフ1名がそれぞれ活躍しています。

外国人スタッフについては、当初日本語でのコミュニケーションに不安がありましたが、互いに学び合いながら仕事を進めるうちに、今では夜勤も担当できるようになり、介護スタッフとしてご利用者やご家族からも高く評価されています。外国人スタッフの明るさや熱心な働きぶりが、ご利用者の笑顔を増やし、食事の量が増えるなどの良い影響も出ています。そうした姿を見て、日本人スタッフも刺激を受け、共に成長する機会となっています。

また、障がいのあるスタッフも、自身の特技を活かして、清掃担当やデイサービスでの機能訓練指導員として活躍しています。特に、デイサービスでは按摩士(あんまし)の資格を持つスタッフが、ご利用者のニーズに応じた施術を行い、施設のサービス向上に貢献しています。

多様な人材の活躍と今後の展望

介護に携わる職員一人ひとりの得意なことやできることを見出し、お互いに協力しながら取り組んでいくことが大切だと考えています。当施設では、知識や技術の向上、そして働きやすい職場づくりを目的に、外国人スタッフや障がいのあるスタッフを対象とした研修などを定期的に実施しています。今後も、外国人スタッフ、障がいのあるスタッフの活躍を積極的に支援し、より多様な人材が働ける環境を整えていきたいと思っています。

介護の仕事は、単にケアを提供するだけでなく、人と人とのコミュニケーションの場でもあります。だからこそ、これからもずっと必要とされる仕事であり続けてほしいと思っています。

CASE

02

見守りセンサーを活用した安心で快適なケアと負担軽減

医療法人 博光会
介護老人保健施設 ぼたん園
施設長　橋口 玲子さん
［熊本市南区］

動画は
コチラから
▶

見守りセンサーの導入により、利用者の睡眠や覚醒の状態がモニターで確認できるため、オムツ交換やトイレ誘導のタイミングを適切に調整できる。コール対応や巡視の負担軽減にもつながっている

これまでの夜勤の状況と見守りセンサー導入の効果

夜勤は日勤に比べて職員の数が少ないため、常に注意を払う必要があります。わずかな物音や小さな声にも気づき、即対応しなければなりません。コールが鳴ると職員はすぐに駆けつけますが、ご利用者が自力で訴えられない状況もあります。また、多床室では、コール対応の物音で他のご利用者の睡眠を妨げてしまうことも課題でした。

そこで、見守りセンサー等を導入し、モニター上で「今休んでいる」「目が覚めている」といったご利用者の状態が一目で分かるようになり、これまで定時で行っていたオムツ交換も、「この方はまだ休まれているから、少し時間をずらそう」「今起きられているからトイレを案内しよう」と、ご利用者の状態に合わせた対応が可能になりました。

コール対応のために走り回ることが減り、巡視の頻度も抑えられることで、職員の負担が軽減されるとともに、ご利用者にとっても、より安心で快適なケアにつながっています。

介護テクノロジー活用の今後の展望

限られた職員であっても、介護サービスの質の維持・向上を図っていくことが大事です。例えば介護テクノロジーの一つに、排泄を予測・検知できるものがあります。これを活用すれば、適切なタイミングでトイレに誘導できるようになり、オムツの使用を減らすことにもつながるかもしれません。

介護の未来は、ICT化やAIの活用が進み、テクノロジーに託せる部分が増えていくでしょう。だからこそ人にしかできない介護の専門性が、これまで以上に求められる時代になります。テクノロジーと人の力が共存することで、より質の高い介護が実現できると確信しています。

CASE

03

世代を超えた地域交流の場づくり

有限会社美里在宅支援事業所
NPO法人みさと
取締役／理事　一川 大輔さん
［芦北町］

動画は
コチラから
▶

左／デイサービスに併設する図書館。熊本県立大学柴田研究室の学生や画家の大平由香理さんなどたくさんの方々の支援でつくられた
右／図書館の横に設けられた小さな畑。ここも地域の子どもたちと施設を利用する高齢者がふれあう場になっている

NPO法人を立ち上げた理由と具体的な取組み

私たちが介護事業を展開している中山間地域では、人口減少が進み、将来的に地域が成り立たなくなるのではないかという危機感を抱いていました。そこで、地域の資源を活かし、課題を解決するためにNPO法人を立ち上げました。

具体的な取組みの一つが、令和2年7月豪雨による水害の後、事業所の一部を図書館として整備したことです。この図書館の設立には、県立大学の学生をはじめ、多くの人が協力してくれました。現在は、山間部の子どもたちが学校帰りなどに気軽に立ち寄れる場として運営しており、デイサービスを利用する高齢者と子どもたちが自然に交流できる環境が生まれました。この取組みは子どもたちや高齢者だけでなく、職員にとっても良い影響をもたらしています。

また、以前は大人だけで行っていた活動に子どもたちが加わるようになったり、子どもが図書館を訪れた際に高齢者と関わるようになるなど、世代を超えた交流が増えています。こうした変化こそが、私たちの取組みの大きな成果の一つだと考えています。

世代を超えた地域交流の将来像

令和2年7月豪雨から4年が経ちますが、その間にも人口減少が進んでいます。こうした状況を踏まえ、地域の皆で知恵を出し合いながら、子どもから大人、高齢者までが互いに助け合える地域社会をつくっていきたいと考えています。その一環として、介護事業を地域の支え合いの場のひとつとして発展させていければと思っています。

私たち介護職は、誰かに元気を与えるだけでなく、逆に利用者の方々から元気をもらうことも多くあります。だからこそ、若い世代のクリエイティブな発想を取り入れながら、一緒に楽しく、魅力的な仕事を生み出していきたいです。

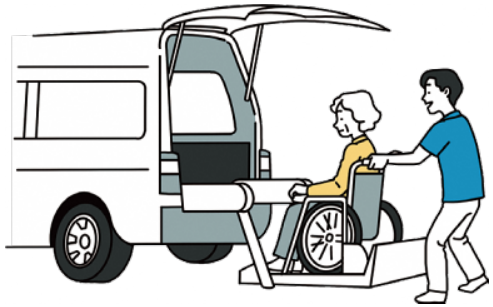
CASE

04

産学官が連携した スマート福祉人材の育成

熊本県立阿蘇中央高校
校長　米村 祐輔さん
［阿蘇市］

動画は
コチラから
▶



スマート産業人材（介護福祉分野）の育成を通した阿蘇市の活性化と企業を支える人材の確保並びに阿蘇中央高校の魅力向上に関する連携協定が結ばれた

スマート福祉連携授業とは？ 取組みのきっかけと効果

教育現場において、デジタル技術を活用した学びの必要性を常に感じていました。また、地域の介護施設からは、介護職の人手不足について相談を受けていました。地域とどのように連携し、その力を教育現場に取り入れるかも課題となっていましたので、産学官が連携して、最新技術を取り扱うことのできる人材を育成する「スマート福祉連携授業」の取組みを進めることにしました。

そこで、熊本県福祉介護用品協会、熊本県介護福祉士会、阿蘇市、そして本校の四者で連携協定を結びました。この協定により、福祉介護用品協会の協力のもと、介護ロボットを学校に貸出していただきました。また、介護福祉士会や阿蘇市の協力により、地域の介護施設の関係者が、学校で行う介護ロボットの授業に参加できるようになりました。介護施設の方々が参加することで、生徒とのコミュニケーションの場が生まれ、介護のやりがいや楽しさを直接伝えていただけるようになりました。非常に有意義な取組みであると感じています。

スマート福祉連携授業への期待

この取組みを継続することで、介護ロボットの操作に習熟した生徒が、地元の介護施設に即戦力として就職できることを大いに期待しています。また、施設の方々が介護ロボットを実際に見て、「このロボットを施設に導入したい」と考えるようになれば、さらにロボットの導入が進み、使いこなせる生徒たちが、より現場で活躍できるようになります。このような好循環が生まれることを目指し、現在、事業を推進しているところです。

この取組みをさらに進め、介護施設の方々が気軽に学校を訪れ、生徒と自然にコミュニケーションをとれる環境をつくっていきたいと考えています。